

昭和13年7月31日第3種郵便物認可  
平成20年4月5日発行(毎月5日1紙発行)  
第48巻4月号(通巻585号)

# 風土



4

二月大名

神蔵器

ひとり出て春満月につき当る

春節や紹興酒大甕に梅

椿<sup>あぶ</sup>油<sup>ら</sup>しぼる二月大名四代目

雛飾る流人の裔の墓守りて

詠み捨てにして佗助の五万石

袖にして紺屋こゝや小町も紅椿  
雪まじり水の甘さや誕生日  
春星の一顆二顆三顆父母の上  
桂郎に余生はあらず亀鳴けり  
黒土の一坪足らず午祭  
啓蟄や大僧正の念珠の手  
受験了ふ孫の志織に春灯



# 竹間集

同人作品



初 曆

高橋邦夫

松飾るまで徒然のたなごころ  
一泊の山の宿より来し賀状  
ちちははの忌日書きこむ初曆  
空井戸の口あいてゐる冬至の日  
いにしへの人なつかしき松の内  
亡き人の亡きこと思ふ青木の実  
滝凍ててせつぱつまりし空のいろ

旅 始

代田青鳥

タイペイへ一跨ぎして旅始  
起重機の乗つかつてゐる初荷かな  
願ひ事一つと決めて初観音  
息白し緑の下より人現るる  
霊木の鎌足の杉淑気かな  
さみどりの色を零して七日粥  
思ひ切り笑つて終る女正月

海 鼠 桶

関根洋子

臘梅やイカロスは翼<sup>よく</sup>失ひぬ  
つくばひの小さき宇宙や寒北斗  
冬の月白湯のやうなる雅楽かな  
噛むことを忘れてゐたるなづな粥  
平成の闇はむらさき海鼠桶  
天狼の大き瞳に見下ろさる  
白妙の波うらがへる去年今年

雪しづり

田中佐知子

鳩出でて塩蔵のかげ崩れたり  
風垣に真青な竹の五六本  
大寒の神に海桐は実を弾く  
松過ぎの盛り砂崩る社殿かな  
山裾に子等の産土神落葉焚  
雪しまき固く錠せる籠堂  
薬師仏秘め一山の雪しづり

鈴の音

南うみを

切干の搔き寄せられて鯨幕  
風花や窠出しの炭鳴りひびき  
寒鯉のひしめいてゐる柱かな  
電灯の紐つぎ足すや雪ごもり  
探梅やけもの跡の雪を踏み  
なやらひや炎の中の鈴の音  
泡ゆらぎ春の氷となりけり

枯 蔦

島谷征良

白菜の尻ばかり見せ売られけり  
枯れつつも飛ばんとしたる芒かな  
海の上に富士浮いてをり冬霞  
読書三昧晴の日の炬燵にて  
枯蔦をひつぱがしたる壁のあり  
咳き込んで目の奥あつくなりにけり  
松に目を遊ばせをれば時雨かな

堅田湖族

大竹淑子

寒禽のひとつは鳩よ時計台  
大樟は京大のロゴ寒日和  
光陰や大樟寒の実を庇ふ  
天神は古都の戌亥や風花す  
早梅や張り子の神馬耳立てて  
竈社の神の頭上や寒鴉  
寒禽や堅田湖族の常夜燈

寒 九

— 岩木 茂 —

初 東 風 や 皇<sup>すめらみこと</sup> 尊 の 手 植 松  
な だ ら かな 棚 田 に 雪 の 寒 九 かな  
大 寒 の 浦 抱 き 寄 せ て 若 狭 富 士  
浜 干 し の 一 連 の 雑 魚 雪 催  
切 干 を 震 は す 日 本 海 の 風  
牡 蠣 打 ち の ま は り が か く も 濡 れ て を り  
潮 騒 に 生 み 落 と し け り 寒 卵  
て の ひ ら に 風 花 と い ふ し づ く かな  
鯉 生 き て を る か 木 の 実 が 落 ち に け り  
新 し き 手 袋 雪 を 掴 み け り

雪だるま先生おはようございます  
あをあをとただあをあをと龍の玉  
貫はれて形見のもんぺ野に出づる  
植うるもの決まらぬ畑を打つ四温  
やがて熱うなる大根を洗ひし手  
父在りしなばと雑炊吹き冷ます  
ちちははの眼差しありぬ日向ぼこ  
雪山の雪につづける懸大根  
一山に靄立ち上る露の臺  
幾千の仏顔出す雪解かな

# 山河集

同人作品



神蔵器選

夜干するタオルの白き冬銀河  
病院の空中廊下冬日差す  
一分で茹でる青菜や久女の忌  
ペランダの鳥寄せ水も凍りけり  
一月の夢にも撓ふ仏の手

平田紀美子

冬すみれ初心のいろに咲いてをり

浅田光代

息白く都大路を渡りけり  
仁和寺の和尚とふくら雀かな  
吉田山雪の追儼となりにけり  
炭をつぎ鬼待つ左京消防団  
身に叶ふ硯一面去年今年  
菅浦に素足詣でや冬苺  
歳晩の三千院より便り来て

林いづみ

霜柱踏みしめ永代供養せり  
みちのくの闇奥深し懐炉抱く

京都大学

南奉栄蓮

学徒兵の終の手紙や寒鳥  
息白く大和大路を福享けに  
板叩く聾戒を呼びおこし  
寒気凝る噴煙の立つ大観峰  
陸の灯を離るる寒の夜の航  
神武天皇船出の浜や初御空  
お降りの虹や子もなし夫もなし  
薪三本添へて知覧の松飾  
凍りつく阿蘇山頂の注連飾  
青竹の香りひろがる年酒汲む

奥田茶々



◇特別作品◇(抄)

## 閑谷学校

杉本葉王子

一月の閑谷の空真青なり  
冬木立石堀まろき人造り  
正月や藩主お成りの医薬門  
学問を守りて冬の楷樹  
冬うらら螢の夢は人造り  
講堂の床に塵なき四日かな  
冬うらら十の柱に花頭窓  
霜柱学舎完成に三十年  
初素読姿凜々しき円座かな  
水仙の香り満ちてし孔子廟

# 風土独語／神蔵器



一月の北岳墓標かがやかす 林 いづみ

この句の墓標は飯田龍太先生。北岳は山梨県北西端に聳える南アルプスの主峰である。

昭和十二年頃、前田普羅は、詩友であり、かねてより私淑していた飯田蛇笏を山盧に訪れている。その折、山盧の後山に案内され、甲斐東八代郡方面から、北方の甲信国境の山々を、蛇笏の指差す彼方に眺め感動し、気魄のこもった傑作を何句ものこしている。

奥白根かの世の雪をかがやかす 普羅

もその時の作で「甲斐の山々」連作の五句の結びに置いている。

「奥白根」は、いわゆる白根三山を遠望しての総称で、普羅の造語とも言われているが、北岳、間岳、農鳥岳とほとんど等間隔に北から南に一列に並ぶ、何れも三〇〇〇メートル以上の高峰である。普羅が「奥白根」と「奥」といったのは、山盧の後山から遠望すれば、地蔵岳、鳳凰岳など連なった山系のもう一つ奥ということ、何より白根三山の一番奥ということ、これは勿論北岳であろう。

掲出句については、私などの贅言は峻拒する厳しさをもって「かの世の雪をかがやかす」は北岳であり飯田龍太だ。

炭をつぎ鬼待つ左京消防団 浅田 光代

「去来抄」の先師評を思い出した。

下京や雪つむ上の夜の雨 凡 兆

この句ははじめは上の五文字がなかった。先師（芭蕉）をはじめ門人たちがいろいろ置いてみて結局この「下京や」にきめた。しかし、凡兆は一応「あつ」と答えたが、まだ充分納得しかねている様子であった。そこで芭蕉は「兆、汝手柄に此冠（上五）を置くべし。若しまさる物あらば、我二度俳諧をいふべからず」とある。

掲出句を私が採ったのは誤解をおそれずに言えば、「左京消防団」の「左京」にある。左京区は京都の北東部に当る地域で、節分祭の行なわれる吉田神社は吉田山（一〇三メートル）の麓にある。吉田神社は京都の表鬼門にあたり、追儺式は杉木立の中、松明に照らし出される鬼やらひととして独特なものがある。普段は閑散とし、夜など一人歩きは怖いほどであるが、節分祭には約百万もの参拝者に広い境内も埋めつくされるという。当然警戒も厳しいはずであるが一般の車は勿論消防車も境内に入れない。そこで一隅にテントが張られ「左京消防団詰所」と掲げ、その中の平土間に少し土を掘って炉のようにして炭火を焚いて、かろうじて寒さをしのぎ、交替しつつ火災や事故などの警戒にあたっていているようだ。

北区でも右京区でもよいようだが、私は「左京」に心うたれた。芭蕉の言葉借りれば「あなたの手柄とされたい」。

# 風土集



## 神蔵器選

小黒坂近くて遠し去年今年 東京 林 いづみ

一月の北岳墓標かがやかす

山一つ逆さに宿し湖凍つる

白足袋を下ろして人に逢ひに行く

夢ひとつキヤメルのコートポケットに

花石路や僧の足駄のよく響き

百年の一本松や寒鴉

松過ぎの劇場にただよふカレーの香

護摩行に和す大太鼓寒の明け

音たててフアスナー引き上ぐ冬早

寒椿落つを受け止む手の熱き

折りにくき膝となりたる初茶席

今生の誠の色に冬茜

僧近く寄るまで慣れし子連猿

熊野古道立つ間も無かり霜柱

相模原

天野みゆき

血圧計腕を締めあぐ霜の朝 川崎 北島 和装

東京の雪やとつびんぱらりのぶ

初御空始発電車の加速して

来客の靴を揃へる恵方かな

銭湯の煙突高き初湯かな

煤逃の街の洋画に涙して

重ね着や午後は睡気のかむさり来

菩提子の枯葉に脈の透きとほる

時雨聴く蓮池魚藻文の壺

隅にして声揚げてゐる石路の花

あかあかと日差しを恋ふる冬苺

一本の凸凹道の淑気かな

手に慣れし包丁拭ひ年惜しむ

窓辺に来る雀二、三羽四温かな

仁王門を出て初蝶を見失ふ

横浜

島田 和子

横浜

三浦象おり